

京大チームが世界大会で優勝 第2回国際ナノ・マイクロアプリケーションコンテスト (iCAN2011)

Big News です。 京大チームが世界大会で優勝しました。出席した田畑教授の話によると、スピーチも見事で満場の喝采を浴びた由。 大慶の至りです。 さらに特筆すべき事は、授賞式で優勝賞金の3000USD を東北地方太平洋沖地震の被災者のために寄付すると申し出たことです。 彼らは、世界大会に向けて準備しているときから、入賞することができたら、獲得した賞金を被災地に送ろうと決めていました。 この強い思いが彼らをより一層奮起させたことは間違いありません。

このような学生を擁している京大機械系は、やはり素晴らしい !!

前京機会会長 久保 愛三



iCAN2011 出席記

チーム TBT :

秋柴俊之、上杉晃生、岡崎佑哉、北村彰男、片山拓

私たちマイクロエンジニアリング専攻ナノ・マイクロシステム工学研究室（田畑研）の修士1回生の有志を中心に結成されたチーム「TBT」は、6月5、6日に北京で開催された第2回国際ナノ・マイクロアプリケーションコンテストに出場し、1st Prize を受賞しました。このコンテストはMEMS（微小電気機械システム）を用いたアプリケーションを提案し、試作した成果を競うものであり、15の国と地域から約8000人の学生が参加しました。各国の予選を勝ち抜いた1～4チーム、計27チームが北京で開催されたファイナルコンテストに進みました。チーム「TBT」は昨年12月に仙台で行われた国内予選で優勝し、ファイナルコンテストに進出することができました。

作成したアプリケーションは手話で使われる指文字を認識し、音声に変換する装置で、指文字翻訳機「TEMS」と名付けました。この装置はMEMS 加速度センサと磁気センサを組み合わせることで指の形を判別し、対応する音声

に変換するものです。これにより、聴覚障害のため言葉を発することが不自由な方が、手話を知らない人に意思を伝える事ができます。このアプリケーションは社会への貢献が期待されており、昨年末に毎日新聞の1面でも取り上げられました。



<指文字翻訳機 TEMS >

指文字は視覚言語の一つで、手話学習の第一歩といわれています。1つの音に対して1つの右手の形が割り振られています。通常手話では腕や手のひとまとまりの動作に、意味をもたせた手話単語を用いて意思を伝えますが、手話単語にない固有名詞や地名などを表現する際に指文字が使用されます。さらに、日本語では、ひらがな一つ一つの文字に対してそれぞれの指文字が存在するので、一音一音表現することで単語だけでなく少し高度な文章を表現することが可能です。



指の曲げ伸ばしの判定

図1 磁気センサー



この指文字を音声に変換するために、まず指の形を判別する必要があります。私たちは各指の曲げ伸ばしと、手の方向に着目しました。この2つの要素を組み合わせることで、指文字の大半を表現できます。この二つの要素はMEMSセンサを用いることで判別しました。各指の曲げ伸ばしの判定には磁気センサを用いました。各指先に磁気センサ、手のひらに永久磁石をとりつけました。

指を曲げて指先が手のひらの永久磁石に近づくと、センサ周囲の磁気が強くなるため、指の曲げ具合を検知できます(図1)。



図2 加速度センサー

一方、手の方向の判定には加速度センサを用いました。手の甲に取り付けた加速度センサで、垂直下向きに生じている重力加速度との角度を検知することで手の方向を判定します(図2)。右手に取り付けたこれらのセンサが読み取った情報はマイコンに送られ、指文字の種類

が判定されます。そしてあらかじめ録音されている音声スピーカーから発声されます。音声再生されるタイミングは左手に持っているスイッチを押すことで行います。

<コンテスト>

6月5日のプレゼンテーション審査と5、6日両日に行われたブース発表による一般投票で勝敗が決められました。どのチームも各国の予選を勝ち抜いてきたこともありアプリケーションの完成度が高く、接戦が予想されました。チーム「TBT」はブース発表で積極的に来場者にアプリケーションをアピールして票を集め、またプレゼンテーションでは満足いくデモンストレーションをすることができ、見事1st Prizeを受賞することが出来ました。このコンテストで我々は各国の参加学生と交流することができました。

仲良くなった隣のブースの中国の学生が我々のアプリケーションを中国人の一般来場者に中国語で説明してくれたというシーンもありました。

<コメント>

コンテスト前は講義や研究で多忙で、コンテストの準備に割ける時間は限られていました。その少ない時間の中でメンバー全員が1st Prizeを目指

し各々の最大のパフォーマンスを出し合ったからこそ、このような結果を残すことができたと思っています。 チームワークの大切さを身に染みて感じました。 またこのコンテストでは将来を期待されている世界中の学生と競い合い、また交流するという大変貴重な経験をすることができ、このような機会を提供し支援して下さった関係者の皆様にとっても感謝しています。



第二話 製鉄業界就職第一号の京大生 ～技術者の美学を貫いた男～

(その6)

千々木 亨（昭和54年度卒業）

1.1. 尚徳翁 官営八幡製鐵所へ任官

尚徳翁が1900年（明治32年）7月に官営八幡製鐵所に入社した時、製鐵所はまさに建設の真っ最中であった。西日本中から人を集め、遠浅の洞海湾を浚渫し、ひなびた漁村の海岸を補強し、ドイツ人技術者向けに洋館作りの官舎を建て、当時最も高い建築物であった日本の天守閣を凌ぐ巨大な溶鉱炉や熱風炉を次々に立ち上げて行った。その様は当時の日本の他の地域では決して見られない壮観な風景であった。

当時の門司新報によれば、明治34年の作業開始式で京都帝国大学理工科大学初代学長の中澤岩太教授の祝文が朗読され、製鐵所来賓として京都帝国大学教授一行が招かれたとある。製鐵所建設には当時の京都帝国大学の理工系教授陣がかなり関わっていたことを伺わせる記録である。（製鐵所立上げに関する苦難の物語については他の機会に譲る。）

さて、尚徳翁は任官するや否や、急速に拡張されてゆく製鐵所の土木工事を矢継ぎ早に担当してゆくことになる。明治35年には技師に任ぜられ、明治44年修築科長となる。大正4年には米英国に出張している。

手がけた工事も繫船壁築造工事には始まり、40万坪の洞岡埋築、八幡・戸畑電気運漕鉄道建設、そして河内ダムと河内・養福寺貯水池建設といずれも当時の日本で最大級の土木工事ばかりである。しかも尚徳翁は社会人人生の中で八幡の地から移動することなく、八幡の地で工場基礎から、貯水池、埋立浚渫、港湾（護岸・岸壁）、軌道、道路、橋梁、



青年技師時代の沼田尚徳氏
（沼田家 提供）

トンネル、水道設備、建築工事、測量にいたる実に多彩な分野で計画・設計・施工の各局面の技術指導にあたった。尚徳翁は創生期の官営八幡製鐵所の発展と共に、日本をリードするオールラウンドな技術者に成長していったと言えよう。

12. 尚徳翁の最初の挫折

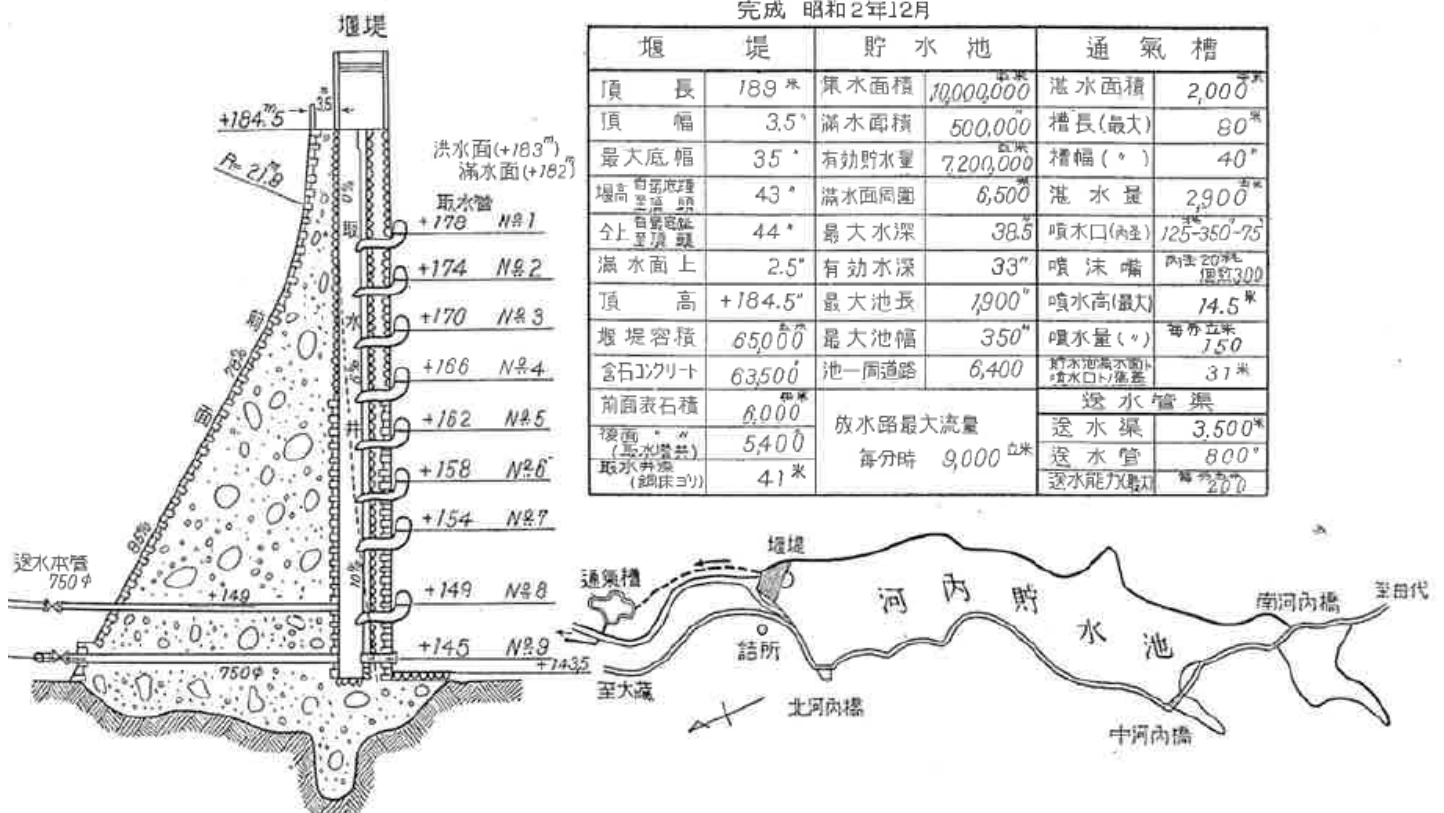
そんな飛ぶ鳥を落とす勢いの尚徳翁が大きな挫折を味わったことがある。大正5年八幡構内の下大谷貯水池（跡地は現在、大谷球場となっている）の決壊事故である。大正5年3月に竣工したこの貯水池はわずか1ヶ月余り後の4月27日の豪雨で脆くも決壊し、製鐵所や付近の住宅地域に多大な被害を及ぼし住民1名の尊い命を奪う大惨事を引き起こした。この事故は欧米視察の出張から尚徳翁が帰国した祝いの宴の最中に起こった。夜中、事故現場に駆け付けた尚徳翁が目のとりにしたのは濁流に流され無残に崩れ去った堰堤の姿であった。尚徳翁自身が後の回顧談で述べているが、事故の原因は堰堤の強度不足にあった。

貯水池の堰堤では、強度確保と漏水防止の為中心部に粘土を用いたコア堤を設け、周りを普通の土で囲うのが一般的な設計である。が、この堰堤では廃線となった九州鉄道の土手を流用され、赤土が混ぜられた粘土がコア堤に使用され

河内貯水池一覽表

起工 大正8年5月
完成 昭和2年12月

堰堤	貯水池	通氣槽	
頂長 189 米	集水面積 10,000,000 ㎡	湛水面積 2,000 ㎡	
頂幅 3.5 米	満水面積 500,000 ㎡	槽長(最大) 80 米	
最大底幅 35 米	有効貯水量 7,200,000 立米	槽幅(°) 40°	
堰高 前部底理 43 米 全上至頂 44 米	満水面周囲 6,500 米	湛水量 2,900 立米	
湛水面上 2.5 米	最大水深 38.5 米	噴水口(内径) 125-350-75 米	
頂高 +184.5 米	有効水深 33 米	噴沫嘴 内径 20 米 個数 300	
堰堤容積 65,000 立米	最大池長 1,900 米	噴水高(最大) 14.5 米	
含石コンクリト 63,500 立米	最大池幅 350 米	噴水量(°) 毎分 5 立米 150	
前面表石積 6,000 立米	池一周道路 6,400 米	貯水池湛水面積 噴水口・落差 37 米	
後面(高水堤共) 5,400 立米	放水路最大流量 毎分 9,000 立米	送水管渠	
取水井深(鋼床コリ) 41 米		送水渠 3,500 米	送水管 800 米
		送水能力(毎分) 200 立米	



河内貯水池とダムの概要図 (出典 八幡製鐵所50年史)

た。そのため所定の強度が確保出来なかったのである。 尚徳翁は直接の設計施工責任者ではなかったが、修築科長という立場から管理責任の一端を担うこととなり3ヶ月間1/10を減給されるという厳しい懲戒処分を受けた。

尚徳翁にとっては減給よりも事故により貴い命が犠牲になったことが大きな心の痛手となったようである。その後、この事故の教訓から尚徳翁は、建設現場を自らの足で歩き自分の目で確認する現場第一主義の仕事のスタイルを育ててゆくことになる。

1 3. 尚徳翁の渾身の大事業 河内貯水池建設

数々の尚徳翁の功績の中で最も特筆すべきものはなんと言っても河内貯水池の建設である。河内貯水池の建設は1918年、鋼材年産65万トンを目指した製鐵所第三次拡張工事での水源拡張対策の一環として、遠賀川水源の養福寺貯水池と共に決定された。背景には1914年に勃発した第一次世界大戦による鉄鋼需要の増大があった。

河内には東洋最大級のダムを建設することとなり尚徳翁はこのダム建設の総責任者となった。ひとつの村をすべて水没させる大工事である。尚徳翁はここで、それまで培ってきた、「土木は悠久の記念碑である」というヨーロッパの土木哲学を具現化すべく英知と情熱を注ぎ込んでゆく。



河内ダムと貯水池

建設現場の旧河内地区は八幡製鐵所の南10kmほど谷あいであり、人家が31戸ほどの水利に恵まれた平穏な農村であった。村はずれには草競馬場もあるのどかな村落は、豊かな自然と清流に恵まれた豊穡の地であった。一方でこの地域は明治7年以降、河内教育と呼ばれた僻地独特の小規模マンツーマン教育の根ざした教育先進地域でもある。当時始まった都市部からの区域外児童の留学受入れは今も続いている。そういった豊かな自然と教育環境で育ったからであろう、村人たちは立ち退きにも快く応じ、むしろダム建設に大いに協力したという。ダム建設では発破がけで採集された石を洗って利用したが、その石洗いの仕事も地域の村民が率先して手伝ったという記録もある。製鐵所と地域が一体になった工事を指揮した尚徳翁は村民たちや従事した労働者たちに大変慕われた。

上流側を掘り起こし砂利を採集し川の水で洗い落として堰堤へ運ぶ作業は繰り返し続いた。最初、輸送にはトラックが用いられたが後半には八幡製鐵所から蒸気機関車が2台持込まれた。放水路にはオーバーフロー型が採用された。豪雨により水位が急速に上昇した場合はダム左岸に設置された放水溝に水が自動的に流れ込み、ダム下流の板櫃川へ流れ落ちるといったってシンプルな仕組みである。

(つづく)

—— 京機短信への寄稿、宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

宛先は京機会の e-mail: jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願い致します。

野次馬話 第25話 「深くお詫び申し上げます」

S43 卒 遠藤 照男

冒頭に、時計なしに一秒間を正確に知る方法を披露しておこう。 極限の速さで「達磨さんが転んだ、達磨さんが転んだ、達磨さんが転んだ・・・を、口の中で繰り返し、繰り返した回数を勘定してみたい。1秒間に5～6回繰り返せるだろう。 これを知っておけば、10秒でも1分でも時間を知ることが出来る。 極限の速さでやるのはバラツキを排除するために必要な条件である。12345678、22345678、 32345678、42345678・・・と区切るやり方がより正確で、丁度1秒になる末尾の数値が6か7か8かを予め知り訓練しておけばそのまま秒針代りになり、周囲の人を驚かすことが出来るのは必定である。

この2年くらいになろうか、事件の渦中の人物、或いは関係者全員が揃って、深々と謝罪する場面を目にする。 頭を下けている時間は5～10秒、複数なら必ず全員一致している。 画一的な行動には演出臭が漂い真の謝罪が感じられない。 偽メール事件の代議士然り、不祥事を起こした病院の経営者や会社幹部然りである。新聞・TV記者が、正義の視聴者が「頭の下げ方が短い！」と批難するから、頭下げを当事者にとって不可欠な儀式にしまったのである。

謝罪の心の表わし方は様々であり強いられたものであってはならない筈だが、偽メール事件の議員の謝罪会見など、無理に陳謝させられて頭を下せられた雰囲気しか感じられず、十数秒間頭を下げるプレーをしていたに過ぎない。 また、集団で謝罪を行う際に同じ時間頭を下けているなどありえないのだが、事前に演出者から教えられるか打合せをしてリハーサルもしていたのだろう。揃っていない場合は、「達磨さんが・・・」の手法を教わらなかったのが若干のずれが生じた、と勘繰っている。

但し、深～く頭を下げ続けるような形式張った頭下げではないので悪い感じは持たなかったのだが、実はとんでもない食わせ者だった例がある。 弾みでスピード違反やっしまい、いや一済みません、という感じで出てきたホテルチェーンの社長が、ひょうひょうと頭を下げて謝罪していたので悪い感じは持たなかったのだが、実は全国のホテル建設に当てる設置義務・認可条件違反・違法改修等の差配を抜け抜けと行っていた例である。

教訓：

何事も表層で判断せず一歩おいてみる我が姿勢を堅持しなければ、誤る。

洛友会（昭和 29 年卒）関西地区会 報告

日時：平成 13 年 5 月 9 日 12 時～ 14 時

場所（社）大阪倶楽部 出席者：15 名

洛友会は毎年 5 月第 2 月曜日に大阪倶楽部で関西地区の同期会を開催しています。今年は 15 名が集まりました。昨年は親授式に出席するため欠席だった嶋本会員ですが、本年はあらためて同氏を迎えて受賞のお祝いをしました。

限られた時間のため、詳しくは聞けなかったわけですが、それでも叙勲について賞牌（勲章）制度の歴史と勲章の種類など、そして親授式の様子も聞きました。また受けられた瑞宝中綬章の実物を見せてもらいました。その後は毎年の通りそれぞれの近況を語り合いました。話題に出てきたこともあって絵画・書・写真などの趣味の作品を持ち寄って作品展を開こうということになりました。11 月 15 日から一週間、西宮市立図書館の市民ギャラリーにて開催する予定で、既に 9 名の出展が見込まれています。これからさらに多数の参加を呼び掛けたいと思っています。（岡崎記）



S42 同期会 報告

京機会 S42 学年代表幹事 藤川 卓爾

平成23年5月13日(金)、北品川の「金時」にて恒例の関東地区同期会を開催しました。関東在住者を中心に10名が集まりました。東日本大震災被災地の仙台からも清野氏が出席しました。大震災・大津波と原発事故が話題になり、幕末、敗戦に続く第三の国難にシニア世代はいかに対処すべきかを議論しました。また、出席者のうち3名が参加した4月の九州支部行事の種子島宇宙センターや屋久島縄文杉の思い出話も披露されました。

出席者：岡 毅遥、清野 慧、長崎 啓(幹事)、榎村 勝、林 正広、藤川 卓爾、前野 幹彦、間瀬 俊明、元木 敏雄、若園 修



京機・京都の会 第51回例会のご案内

多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

日時： 2011年7月2日(土) 11時00分～13時30分

場所： ウェスティン都ホテル(京都) 西館3階 菊の間

(Tel 075-771-7111、担当；岡本圭史様)

会費： 5,000円

幹事： 森 惇暢、藤尾 博重

京機会HPよりお申込み下さい。(申込締切6月24日)

http://keikikai.jp/dousoukai/dousoukai_osirase/dousoukai_osirase.html

1. ロボット技術（RT）が拓く豊かな日本 ～介護サービスへの産業的挑戦～

2011.5.17

日本経済調査協議会

http://www.nikkeicho.or.jp/Chosa/new_report/fukukawa%28RT%29_top.htm

本日、当会調査専門委員会である「福川委員会」は、『ロボット技術（RT）が拓く豊かな日本～介護サービスへの産業的挑戦～』と題する報告書を発表した。一昨年6月の委員会発足以来、高齢化社会における介護分野の課題解決を主たるターゲットに、様々な視点からの検討を行った結果として、わが国ロボット産業を次世代の中核産業としてテイクオフさせるための提言をまとめたものである。

本論 http://www.nikkeicho.or.jp/report/2011/fukukawa/fukukawa_honron.pdf

講師講演録 http://www.nikkeicho.or.jp/report/2011/fukukawa/fukukawa_kouenroku.pdf

2. 海外駐在員報告書

日本産業機械工業会

平成23年4月号

http://www.jsim.or.jp/kaigai_01.html

(ウィーン)

- バルト諸国のエネルギー事情（その3）＊
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/001.pdf>
- ドイツにおける廃棄物処理政策の現状（その4）＊
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/002.pdf>
- バイオディーゼルの現状報告（その1）＊
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/003.pdf>
- 欧州におけるバイオガスの取組（その1）＊
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/004.pdf>
- 欧州環境情報＊
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/005.pdf>
- 駐在員だより
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/006.pdf>

(シカゴ)

- 米国エネルギー技術開発政策について
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/007.pdf>
- 東日本大震災の米国機械産業・自動車産業に与える影響について
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/008.pdf>
- 米国環境情報
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/009.pdf>

- 最近の米国経済について
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/010.pdf>
- 化学プラント情報
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/011.pdf>
- 米国産業機械の輸出入統計（2010年12月）
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/012.pdf>
- 米国プラスチック機械の輸出入統計（2010年12月）
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/013.pdf>
- 米国の鉄鋼生産と設備稼働率（2010年12月）
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/014.pdf>
- 駐在員だより
<http://www.jsim.or.jp/kaigai/1104/015.pdf>

3. 宇宙基本法に基づく宇宙開発利用の推進に向けた提言

経団連

2011.05.17

<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/049.html>

概要 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/049gaiyo.pdf>

本文 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/049honbun.pdf>

日本経団連は昨年4月に「国家戦略としての宇宙開発利用の推進に向けた提言」をとりまとめ、宇宙産業の基盤強化や官民連携による内外の市場開拓などの成長戦略や、衛星やロケットの具体的なプログラムの推進の必要性を訴えた。その後、6月に政府が策定した「新成長戦略」においては、宇宙分野の施策として、宇宙産業の振興、宇宙システムのパッケージによる海外展開、小型衛星・ロケットの開発等が盛り込まれた。宇宙開発戦略本部でも「宇宙分野における重点施策について」(5月)、「当面の宇宙政策の推進について」(8月)などの重点施策を相次いで打ち出している。

こうした宇宙政策のベースとなるのが宇宙基本法であり、同法に基づき2009年6月に策定された宇宙基本計画では、2009年度から5年間で宇宙関係予算の倍増と総額で最大2.5兆円の政府資金が必要との試算が示された。2010年度の宇宙関係予算は前年度比10.4%増となったが、2011年度は前年度比8.6%減の3,099億円となり、2009年度のレベルに逆戻りし、計画が順調に進展しているとは言い難い状況である。わが国の財政状況は厳しいものの、開発と利用を車の両輪として宇宙政策を重要な国家戦略として進めていくには、宇宙基本計画を軸とし、宇宙関係予算の拡充に向けて最大限の努力をする必要がある。

現在、宇宙開発戦略本部においては、専門調査会が宇宙分野の施策の重点化等の検討を進めており、7月に提言をとりまとめる予定である。本年3月に発生した東日本大震災は、国難とも言える未曾有の被害をもたらしたが、宇

宙を活用した復旧・復興や防災インフラの構築などは、国民の安全・安心の確保に大きく貢献する。こうした現下の重要課題を踏まえ、日本経団連として改めて宇宙開発利用について提言する。

4. 資源の安定確保に関する提言 経団連 2011.05.17

<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/048/index.html>

【 概要 】 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/048/gaiyo.pdf>

【 本文 】 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/048/honbun.html>

I. はじめに

II. 資源の安定供給の確保に向け強化すべき政策

1. 資源の安定調達に向けた政策

(1) 海外資源の確保

リスクマネーの安定的供給

税制優遇措置の拡充

資源外交のさらなる強化

貿易投資環境の整備

(2) 国内天然資源確保

海洋資源開発の強化

適切な主体による国内資源の開発の担保

2. 備蓄に関する政策

3. リサイクルに関する政策

(1) 国内におけるリサイクルの促進

一般廃棄物の広域的な回収の推進

国内リサイクル制度の着実な推進

有用金属を含む廃棄物の適正保管の推進

港湾を核とした広域的な静脈物流の構築

(2) 新興国におけるリサイクル推進

4. 技術開発の促進に関する政策

5. 資源人材育成に関する政策

5. IMD 世界競争力年鑑 (2011年) 三菱総研 2011.05.18

http://www.mri.co.jp/NEWS/report/economy/_icsFiles/afieldfile/2011/05/18/dep20110518-01.pdf



インターンシップ説明会

京機会学生会執行部 SMILE 幅崎昌平

2011年5月27日、我々京機会学生会執行部 SMILE 主催で、インターンシップに関する企画を開催した。当日は、修士1回生と学部3回生を中心にして計87名の学生が参加した。

この企画の目的は、「インターンシップに何となく興味がある学生に、インターンシップに参加することで得られるメリット・デメリットを知ってもらったうえで、インターンシップに参加してもらおうこと」である。また、本企画を、祭のように楽しく活気あふれるものにしたいという思いから、企画の名称を「インターンシップ祭」と名付けた。

企画の内容は、インターンシップについての概要説明、昨年度インターンシップ経験者によるパネルディスカッション、インターンシップ経験者に直接質問できる個別質問タイムの3点であった。インターンシップについての概要説明では、本企画のリーダーである私から、スライドを用いて、インターンシップの日程や選考等の概要を説明した。また、今年独自の内容として、海外インターンシップに関する情報も扱った。パネルディスカッションでは、以下の昨年度インターンシップ経験者の方々にパネラーを務めていただいた。



- ① 志田 航介氏： 松原研究室 修士2回生
インターンシップ先企業： 三菱電機株式会社
- ② 金子 潤氏： 井手研究室 修士2回生
インターンシップ先企業： 大阪ガス株式会社
- ③ 松井 大門氏： 田畑研究室 学部4回生
インターンシップ先企業： BNPパリバ銀行
- ④ 工藤 朋也氏： 松原研究室 修士2回生
インターンシップ先企業： JFEスチール株式会社

各パネラーに自己紹介をしていただいた後、「インターンシップの準備はどうしたらよいか」などのいくつかの質問を私からパネラーの方々にした。その質問に対するパネラーの本音の回答に、学生は真剣に聞き入っていた。個別質問タイムではブース形式にして、インターンシップ経験者と学生が気軽に話せるようにした。学生達は企画終了時間間際までインターンシップ経験者に熱心に質問しており、参加した学生は非常に有意義な時間を過ごせたようである。

アンケート結果からも、多くの学生がインターンシップを生かして社会への見識を広げたいと思ったようであり、学生たちにインターンシップに興味をもってもらい、出来れば参加してもらおうという当初の目的を達せられたと考えられる。また、個別質問タイムにおいて、積極的にインターンシップ経験者に質問する学生も多々見られたことから、SMILEの理念のひとつである、機械系学生間での交流の活発化を図ることもできたと考えられる。今後も、機械系学生間での交流を深めるこのようなイベントを多々開催していきたい。